



その26

宗 覚

—そうかく—
1639年～1720年

(令和7年5月1日号—第356号)



宗覚は、寛永^{かんえい}16年（1639年）に生まれ、延宝^{えんぼう}7年（1679年）から久修園院^{くしゅうおんいん}（楠葉中之芝2丁目）の住職となりました。

久修園院は、神亀^{じんき}2年（725年）、行基（668年～749年）が58歳の時に創建したと言われる、行基四十九院の一つです。この寺は、慶長^{けいちょう}20年（1615年）、大坂夏の陣の際に、逃げ込んだ豊臣方の兵が火を掛けたことで焼失しましたが、復興の依頼を受けた宗覚は、自ら本尊^{ほんぞん}釈迦如来立像^{しゃかにょらいりゅうざう}を修理し、寄附を集めて再興したことから、久修園院^{くしゅうおんいん}の中興^{ちゅうこう}の祖と言われています。

境内に祀られている、高さ6尺（約2メートル）の愛染^{あいぜん}明王^{みょうおう}坐像^{ざざう}は、宗覚が、自身への母の心の深さに思いを馳せ、母の死後8年目に彫り上げたと伝えられています。

多才多能であった宗覚は、徳川綱吉の母桂昌院^{けいしょういん}の援助を受け、元禄^{げんろく}6年（1693年）に、東寺（京都市）の『両界曼荼羅図^{りょうかいまんだらず}（元禄本）』を制作します。これは重要文化財として東寺に所蔵されていますが、その際に、もう一枚複製したものが久修園院に所蔵されています。



境内の愛染堂に祀られている
愛染明王坐像



天球儀

また、元禄15年（1702年）頃に製作された天球儀（銅製。直径52センチメートルの球面に星座を示している。）や地球儀（張子^{はりこ}製。直径20センチメートルの球面に描かれている世界図の各大陸の位置や形状は、仏教的な解釈で配置さ

れている。)は、共に市の有形文化財に指定されています。

宗教活動はもとより、地理学、医学、天文学、絵画、工芸、音楽、武術などにも精通し、多くの業績を後世に残した宗覚は、享保5年(1720年)に82歳で没し、久修園院の境内に今も静かに眠っています。



地球儀